

『竹取物語』の受容から見る、日本と中国の関連

伊 勢 光

「キーワード ① 『斑竹姑娘』 ② 日中比較 ③ 難題求婚 ④ 『竹取物語』 ⑤ 享受」

はじめに

平安時代前期の成立と思しい『竹取物語』。物語の伝統を持つ日本でも最も早い時代に成立したこの物語は『源氏物語』にも「物語の出で来はじめの祖」（「絵合」巻）として取り上げられており、また『竹取物語』の女主人公かぐや姫の「最高の美女でありながら、地上の最高権力者である帝をも拒み月へ帰っていく」という造型は、そののちの多くの物語に受け継がれていった。

具体的な例を挙げれば、求婚譚という形式では『うつほ物語』のあて宮に影響を与えたし、帝を拒むという造型では、同じく『うつほ物語』俊蔭娘、『源氏物語』玉鬘、『夜の寝覚』中の君など、かぐや姫の「末裔」と呼べる登場人物は枚挙に暇がない。かぐや姫的な性質のことを「かぐや姫性」と呼ぶ術語もあるほどであり、のちの文学作品にこれほどの影響力を与えた物語は

他に『源氏物語』を数える程度であろう。今でも「かぐや姫」という題名で絵本になり、映画になり、また二〇一三年にはスタジオジブリによってアニメ映画として劇場公開されました。かぐや姫とその物語は、今なお日本人の心をとらえ続けていると言える。

とするならば、これほど長く日本人から愛されている『竹取物語』は、「日本的」な心象やものの考え方といったものをあつらへる程度反映していると考えられるのではないかと。日本人のものの考え方や感じ方、日本人の「心象風景」に合致しないものがある。ここまで長く日本人に愛されるはずはないからだ。

本論の目的は、第一に、その日本人的なものの考え方や感じ方（「心象風景」のある種の象徴としての『竹取物語』が現代中国に享受された作品として、田海燕が一九六一年に発表した民話集『金玉鳳凰』所載の物語『斑竹姑娘』を考察することである。

そして、その二つの物語における類似と差異の検討を通して、現代中国が日本的な「心象風景」の何を享受し、何を捨象したのかを考えていくことが更なる本論の射程である。

現代中国と日本はどこが違って、どこが同じなのか。現在の日中関係は不幸にして相当冷え切っていると言っている。今ほど、相互理解が求められている時代はないのではないか。その相互理解のために、まずは現代中国が日本から何を受け入れ、また何を受け入れなかったのかを『斑竹姑娘』を通して理解することは、非常に意義のあることではないだろうか。

本論が現在の日中の相互理解の一助となれば幸いである。

1、『斑竹姑娘』のあらすじと成立事情

『斑竹姑娘』は、田海燕が自身の編著『金玉鳳凰』（少年児童出版社、一九六一年）の中に、アバ・チベット族に伝わる民話として収録した児童向けの物語である。

『金玉鳳凰』は一九五四年の春、田を始めとする西蔵地方の代表団が四川省の三峡地域に出向き、そこで集めた民話を整理、出版したという体裁になっている。しかしその後、日本からの調査団を含め、多くの研究者が四川、あるいは西蔵地方を訪れたものの、誰一人、類似の民話を採集することができなかった。このことから現在、『金玉鳳凰』に収録されている物語は民話を整理したものというより、むしろ田の個人的創作の色合いが強い「作品」だと考えられている^{注1}。

その中のひとつ『斑竹姑娘』のあらすじは、簡単にまとめる

ならば以下のとおりである。

金沙江の南に竹を育てている老婆と息子がいた。土地の領主が横暴で、母子が大事に育てている竹も切られそうになってしまった。領主の訪問に備えて竹を川に投げ込んだ息子は、領主が去った後、その竹の中から可愛い女の子を発見する。母子はその子を大事に育てることにする。

美しく成長した彼女のうわさはたちまち広がり、求婚者が押し寄せた。しかし、彼女は求婚者たちに難題を与え、失敗した求婚者たちに求婚を断念させることに成功する。そして、最後は息子と結ばれ、幸せになる。

一読して、『竹取物語』との類似性の強さに驚かされよう。特に竹から生まれた点、求婚者たちに難題を出して求婚を断念させる点などは『竹取物語』とそのまま共通するのである。

『斑竹姑娘』が日本に紹介された時の衝撃は大きかったように、すぐさま君島久子^{注2}、百田弥栄子^{注3}らによって、『竹取物語』の原型とされた。そう考えたくなるのも無理はない類似ではあった。

しかし、先にも述べたように『斑竹姑娘』は、民話から採録したという体裁を取っているものの、今なお類話が発見されず、『竹取物語』より以前に存在した話とは思われない。また『斑竹姑娘』が『今昔物語集』に収録されている、古型と思しい「竹取説話」よりも現「竹取物語」に似ている点から、

むしろ現『竹取物語』を参考にして田が個人的創作を行ったのではないかと考えられるのである^{注4}。

とするならば、どのようにして田が日本の物語である『竹取物語』を知ったのかという疑問が出てくるだろう。

これについては、近年、宋成徳が非常に興味深い見解を提出した^{注5}。宋はまず、謝六逸による『日本文学史』（北新書局、一九二九年）と鄭振鐸による『文学大綱』（上海商務印書館、一九二七年）の存在をあげ、この二冊の書籍に『竹取物語』の梗概が記されていることを述べる。

さらに、鄭振鐸の作品に「竹公主」（一九二五年に「文学研究會叢書」の一つとして、さらに一九二七年には「児童世界叢刊」の一つとして再版されている）なる児童文学があることを指摘し、「竹公主」と『斑竹姑娘』を比較した上で次のように結論づけている。

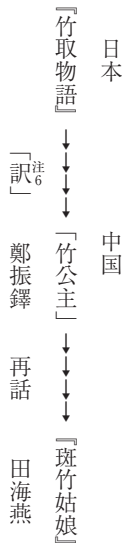
結論を言えば、「斑竹姑娘」の後半の求婚話は『竹取物語』ではなく、「竹公主」の再話である。勿論、「竹公主」は『竹取物語』の再話であるから、「斑竹姑娘」の原話は『竹取物語』にある。

つまり、『竹取物語』が『斑竹姑娘』の原話だと考えられてきた昨今の研究が、宋のこの指摘によって裏付けられただけでなく、『竹取物語』と『斑竹姑娘』の間に「竹公主」を挟むという道筋がかなり明確にたどられるようになったのである。

田も児童文学に携わる者として、『日本文学史』『文学大綱』はともかくとしても、同じ児童文学書である「竹公主」は何らかの形で目を通したに違いない。詳しくは宋の論に譲るが、「竹公主」と『斑竹姑娘』の類似性はかなり高いのである。

さらに言えば宋も述べるように「竹公主」の原話が日本の物語であると知り得た可能性はあるのであって、途中「竹公主」を経由して『斑竹姑娘』が『竹取物語』をもとに創作された可能性は非常に高いと言わざるを得ない。図にすれば、このようになる。

【図】



従って、本論ではより著名で、一部にはなお民話の再録とも信じられている『斑竹姑娘』と『竹取物語』との比較検討を行うわけではあるが、早急に『竹取物語』と「竹公主」との詳細な比較検討も行われるべきであることを言い添えておきたい。

いずれにせよ、本論では以上のような研究状況をふまえ、『斑竹姑娘』（そして「竹公主」）が『竹取物語』の強い影響下になる作品であることを前提に、次節以降、両作品の比較を通して現代中国が日本的な考え、感じ方をどう享受し、どう変改したのかを検討していきたいと考えるものである。

2、ヒロインを見つけるまでの類似と差異

——強欲な領主とそれに対処する農民

まず検討したいのは、『竹取物語』においては翁、『斑竹姑娘』においては息子（ランパ）がヒロインを発見するまでの経緯である。

『竹取物語』では、次のようにある。

いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつつ、よろづのことにつかひけり。名をばさぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。

（『新編日本古典文学全集 竹取物語』一七頁）

それに対して、『斑竹姑娘』のほうは、一筋縄ではいかない。竹が高値で売れるということで、地主も竹林に目をつけているからである。

竹林长成、土司派人砍楠竹来了。（竹林が育った頃、地主が人を派遣して竹を切りに来た。）

（『金玉鳳凰』一四五頁）

竹を切られたランパは一計を案じる。切られた竹を、地主の派遣した人が見ていない隙を狙って川に投げ込んだのだ。

あとで川から竹を引き上げて家に持ち帰ったランパは驚く。

朗巴抱了楠竹回家，小心劈开楠竹一看，竹筒里竟有一个漂亮的女孩（ランパは竹を家に持って帰って、気をつけながら竹を割って中を見ると、竹の中に一人の可愛い女の子がいた。）（一四七頁）

『竹取物語』の翁が『斑竹姑娘』では少年に変わっているのは、ヒロインの相手を務めさせるという目的がある以上当然の変更であるが、その変更もあわせて、『斑竹姑娘』では少年（ランパ）が知恵を凝らして、領主の横暴に対処しようとする姿を特に見ることができないのではないか。

つまり、『竹取物語』にしても『斑竹姑娘』にしても、竹の中にヒロインがおり、いずれにせよ人ならぬ存在を天から授かったということになるわけだが、苦勞せずに与えられる『竹取物語』とは違って、領主からの横暴に耐え、また工夫を凝らさなければ『斑竹姑娘』では天人とめぐり合えないのである。とするならば、ここからは「上に政策あれば下に対策あり」とも言われる中国人の国民性が垣間見えるものではあるまいか。黙っていても何も与えられないのだ。上からの圧力に対して、何らかの対抗策を取らなければならない。対抗策をとって初めて、実りが与えられるのである。この世界は何もせずともまるで木に果実が実るように、ある日行ってみたら「もと光る竹なむ一すぢありける」という生易しいものではない、という認識

がこの変改には明確に反映されているように思われる。

また、この変改には当時の時代背景も絡んでいるのではあるまいか。一九二五年の「竹公主」はこの冒頭について『竹取物語』と同様の展開となっているのに対し、一九六一年の『斑竹姑娘』では、地主が出てきて人々を苦しめるというふうに変わっているのであり、これには意味があるに違いない。

一九六一年といえ、毛沢東による「大躍進政策」の失敗が明らかになった年である。前年の一九六〇年には前年比でGDPが1%も下落し、さらに折からの天災も重なり『岩波現代中国事典』（岩波書店、一九九九年）によれば三千万人もの人々が命を落としている。いわば、『斑竹姑娘』とは中国国民の苦難の時代に生まれた作品であった。

とするならば命すら落としかねないほどの庶民の苦難が、上に立つ者への不信へと繋がり、物語中にも強欲な地主を登場させたと考えるのは自然な図式だろう。地主、あるいはブルジョアたちの強欲や我儘にどう対処し、庶民が幸せになるためにはどうすればいいのか。『斑竹姑娘』はその冒頭からこうした問いかかけを背負っているように思われる。だからこそ『斑竹姑娘』では『竹取物語』には登場しない強欲な地主が登場するわけだし、また竹取の翁ならぬ若者がその地主の取立てに知恵を凝らして対処することで、天からの授かりものを受け取ることができるといえるだろう。

ただ、いずれにせよ双方が竹から登場したというのは大きな共通点であり、『竹取物語』をそのまま受け継いだことは興味

深い事実である。竹の中に人がいたという説話、民話は中国を含むアジア一帯にしばしば見られるものでもあり、現代中国でもひとつの類型として受け入れられやすいものだったということだろう。民話採集の際にも、竹の中に人がいたという要素の話は採集できたはずで、ここは広くアジアの中に、日本も現代中国も存在しているという証と言えらるであろう。

3、求婚者から見る類似と差異——結婚拒否とは何か

さて、竹から発見された女の子は、美しく成長する。その間、『竹取物語』のほうでは「翁、やうやうゆたかになりゆく」と、豊かになっていく様子が描かれるが、『斑竹姑娘』のほうは特にそのような記述がなく、ランパは貧しいままである。

ここからは「清貧」を良しとする思想が見えよう。つまり、資本主義社会ではない新中国に生きる庶民にとつて、『竹取物語』の翁のように「勢、猛の者になりけり」では主人公にふさわしくない。お金はないが、家族で身を寄せ合って生きていくというような主人公が共感されやすいのだろう。

そう考えれば、『斑竹姑娘』において自ずと金も権力もある求婚者との対比が明確になっていることは自明であろう。『斑竹姑娘』では、求婚者たちは揃いも揃って、お金も権力もあるが、愚鈍であるという造型がなされているのである。

这五人都有钱有势，但谁都没有真正的学问和本领，他们只是乘着肥马，穿着轻裘，天天游山玩水。（この五人はみな

財産も権勢もあるが、誰ひとり本物の学問や才能もなく、毎日ただ肥えた馬に乗り、高級な毛皮の服を着ては、野山で遊んでいる。(一四八頁)

さらにその造型を詳細に見ていくと、次のように描かれていることが分かる。

土司儿子仗着自己有势、(中略)官家儿子仗着自己手下人多、(中略)骄傲自大的少年认为自己有盖天的本领。(地主の息子は権勢を頼みにしている。官吏の息子は彼のもとに人が多いことを頼みにしている。驕慢な少年は自分にこの上もない才能があると信じている。)(一四九―一五〇頁)

とあり、属性によって描き分けこそあるものの求婚者たちが世俗的な「力」を持つている一方で、本当の学問や才能には欠けるという点では一様な造型になっているのだ。

つまり、『斑竹姑娘』は天女との結婚という点について、貧乏だが賢明なランパと金持ちだが傲慢で愚鈍な求婚者という両者を天秤にかけているのである。これは『竹取物語』が、この時点では何と何とを天秤にかけているか分からなかったとは違い、(読者が児童であるという配慮のためか)話の筋が明解であるといえよう。

しかし、そもそも難題を出す時点で、女の心が求婚者たちにはないのは明白であろう。なぜ女は難題を出すのかと考えたとき

に、それは求婚を断るための口実以外の理由であるはずがない。もし求婚者と結婚する気があるのであれば、面倒なことをせず求婚者の中から一人を選んで即座に結婚してしまえばいいだけの話だからである。

その点で、『竹取物語』のかぐや姫の言は、たとえそれが遁辞だとしても示唆に富む。

よくもあらぬかたちを、深き心も知らであだ心つきなは、後くやしきこともあるべきを、と思ふばかりなり。世のかしき人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしとなむ思ふ。(中略)五人の中に、ゆかしき物を見せたまへらむに、御心ざしまさりたりとて、仕うまつらむと、そのおはすらむ人々に申したまへ(二二―二三頁)

つまりかぐや姫は、一度結婚してしまおうと男の浮気に悩まされ「くやしきこと」になりかねないため、「深き心ざし」を知らなければ容易に結婚できないというのだ。そして、その「御心ざし」を知るために難題を出したいというのである。

これが結婚拒否のための遁辞に過ぎず、実は彼女は誰とも結婚したくなかったことは、くらのちの皇子が蓬萊の玉の枝を持ち帰ってきた時「取りがたき物を、かくあさましく持て来ることを、ねたく思」ったこと、またそれが偽物だと分かり「心ゆきはて」たことから明らかであるが、重要なのは、そのかぐや姫の姿勢である。

『斑竹姑娘』において、天女は結婚そのものを拒否しているわけではない。それは末尾、彼女がランパと結婚していることから明白だが、求婚者の求婚を退けるのも、結局はランパと結ばれるためという目的があるためなのだ。だからこそ彼女は、ランパと結ばれるため難題を出す。

しかし『竹取物語』かぐや姫は違う。彼女は誰とも結婚したくないのである。その考えの根底には、男は「あだ心」を持つものだという冷めた認識がある。この「結婚拒否」の姿勢は、後の『源氏物語』宇治大君などに受け継がれていくが、平安時代の女性が置かれていた立場を垣間見せて興味深いところがあ

る。彼女たちはどうするのか。『竹取物語』かぐや姫同様、結婚を拒否して、父と一緒に過ごすことを望むのである。『竹取物語』では別れの時に「うち泣きて書く言葉」(七三頁)を残るかぐや姫の姿から、彼女が親としての翁に情愛を感じていることは明らかであり、彼女はつまり結婚を拒否し「父(義父)」の元に生活することを選んでいたのである。同じように『蜻蛉日記』の道綱母も結婚し、夫を持ったものの、彼の「あだ心」に嫌気がさし、何度も父のもとに身を寄せるのであるし、物語ではあるが『夜の寢覚』の中の君も、また「今とりかへばや物語」の四の君も、男の「あだ心」に接して、父の元に庇護を求める場面が描かれていく。

つまり、『竹取物語』におけるかぐや姫の「結婚拒否」は、日本の平安文学全体に通底するモチーフであり、彼女たち(か

ぐや姫とその「末裔」たち)は「夫」ではなく「父」を選んでいることが分かる。『竹取物語』は、それら平安文学の端緒として注目されるわけだが、そうした日本の物語の類型を『斑竹姑娘』は踏襲しない。つまり、男は「あだ心」を持つ、という冷静且つ苦い認識は、そこにはないのだ。児童文学ということも影響しているようだが、賢明な男と一緒になれば幸せになれるという、ある種素朴な(日本の物語で言えば『落窪物語』に近い)認識によって作られているようなのである。

ともあれ、『斑竹姑娘』においても、求婚者たちを退けるために難題が天女から出される。どんな難題が出されたのか、これについては次節で検討していく。

4、難題の類似と差異

——くらもちの皇子と商人の息子の差異を中心に

本節では『竹取物語』と『斑竹姑娘』の難題について比較していきたい。

まず、『竹取物語』では、石作の皇子に「仏の御石の鉢」を、くらもちの皇子には「蓬莱の玉の枝」を、阿倍御主人には「火鼠の皮衣」を、大伴の大納言には「龍の頸の玉」を、石上の中納言には「燕の子安貝」を求めている。

一方の『斑竹姑娘』では、土司の息子に「撞いても割れない金の鐘」を、商人の息子に「打つても壊れない玉の樹」を、役人の息子には「燃えない火鼠の皮衣」を、臆病でホラ吹きな若者には「海龍の額の分水珠」を、傲慢な若者には「燕の巢にあ

る金の卵」を求めている。

大枠で見るとすれば、権力や財力を持った者たちが偽物しか用意できず次々と憂き目を見るといふ展開がまず共通し、この展開から『竹取物語』が『斑竹姑娘』に与えた影響の大きさを知ることが出来る。実際の社会で我が物顔に振舞っている者たちを（その世俗的価値を転倒させて）風刺、揶揄するという物語の一つの機能を『斑竹姑娘』は確かに『竹取物語』から受け継いでいるのである。

もちろん、社会の不合理さを指弾し、時の権力者を批判する諷諭の伝統はすでに中国にあり、その影響を日本文学も大いに享受してきた事実が一方である。しかし、政治、社会の実相を率直に批判する諷諭詩の伝統とは別に、権力を持った者が恋の中で自分の卑小さを明らかにされてしまうという物語展開、そしてそれが同時に風刺、揶揄の視点を合わせ持つという物語は中国にはほとんどなく（『紅樓夢』などはそのような視点が皆無とはいえないが）、その点『竹取物語』の影響は大きいと言えるのではないか。恋によって本性が暴かれ、時にそれが権力者への揶揄、風刺ともなり得る。そうした発想を『竹取物語』は、新中国の物語『斑竹姑娘』に与えているのである。

また、言葉のレベルで見ても同じ意味の言葉が使われていることも注目に値しよう。原『竹取物語』の姿をとどめているとされる『今昔物語集』のいわゆる「竹取説話」（巻三二）では「空ニ鳴ル雷」、「優曇花」、「打不ニ鳴ル鼓」とあるわけで、改作されていると思しき現『竹取物語』の本文による影響の大きさが

知られるが、特に「玉の枝」や「火鼠の皮衣」「燕」など、全く共通する言葉も多い。

ただ、やはり気になるのはその共通する言葉の中に顔をのぞかせる差異である。同じ「玉の枝」でも、『斑竹姑娘』では「打つても壊れない」と説明がついているし、同じ「火鼠の皮衣」でも、『斑竹姑娘』では「燃えない」と説明がつくのである（『竹取物語』でも、真偽の判定のために火にくべる場面があるが、最初から「燃えない」と説明されているわけではない）。壊れない、燃えない、そういった「永遠性」が必須条件として打ち出されているのである。

ここから、『斑竹姑娘』を生み出した新中国において「永遠なるもの」が「素晴らしいものだが、手に入らないもの」として、憧憬されていると考えられるのではないか。

そのことは、石作の皇子と土司の息子を比較しても言える。石作の皇子が求められたのは「仏の御石の鉢」であったが、それは結局「螢ばかりの光だになし」ということで突き返されている。対して土司の息子が求められたのは「撞いても割れない」鐘であったが、「錐子」で天女が鐘を突くと簡単に「大洞」が開いてしまい、偽物だと分かっってしまう。

また、石上の中納言と同じく燕の巣の中にあるものを求められた『斑竹姑娘』の若者にしても、普通の燕の卵をいくつも壊してしまうことから、逆に金の卵は壊れないものであることが推測され、この挿話は壊れないものを求めて失敗する話だと言え換えることができる。

つまり、『竹取物語』以上に『斑竹姑娘』では「形の崩れなもの」「永遠なもの」が求められ、そして手に入らないものとして描かれているのだ。

なお、『竹取物語』ではどのようなものが求められ、かつ手に入らないものとされているかということを『斑竹姑娘』との比較から改めて考えてみれば、それはやはり「外国からの文物」ということが言えるのではないか。役人の息子も「燃えない火鼠の皮衣」を探して旅をするが、それもチベット、北京、四川省と新中国の国内に留まるのである。さすがに「海龍の額の分水珠」については国外に出たが、その場面においても特に外国への憧憬などは見られない。^{注7}

それに対して、『竹取物語』では、外国に行けと言われている石作の皇子まで「天竺に在る物も持て来ぬかは」と天竺に思いを馳せるし、くらのちの皇子は「蓬萊といふらむ山」に行った作り話を詳細にするのである。阿倍の御主人に至っては唐船から高値で偽物の皮衣をつかまされるわけで、彼が無知だったとは言え、今でもブランド物に弱い日本人の習性を思っただけで同情させられる一面がある。

『竹取物語』の「異国への憧憬」と『斑竹姑娘』の「永遠への憧憬」。これは、両国の国民性を今でもある程度表しており、興味深い差異と言えるのではないだろうか。

一方、ほとんど似たような話の展開になっているくらのちの皇子と、商人の息子との類似性にも興味深い問題が含まれている。

この両者はいずれもお金で偽物を作らせるも、職人たちに金の未払いを請求されたことから偽物だということがばれてしまい、求婚に失敗するという点で同じ展開と言える。ここにあるのはコミュニケーションの不全が、求婚の失敗とイコールであるという論理である。

モノの提供を受ければ金品を支払う。これはよほどの未開社会でない限り、取引の原則であると同時に、人間関係の基本であり、かつコミュニケーションの一種でもある。モノの提供を受けたのに金品が支払わなければ、それは強奪であり、あるいは略取であり、人間関係は築かれない。そこにあるのはただの暴力であり、人間的なコミュニケーションではありえないのだ。

お金でモノを作らせること、それ自体は糾弾されるべきことではない。現にかくや姫も一度は騙されて「我はこの皇子に負けぬべし、胸つぶれて思」ったほどであり、かぐや姫を手に入れるのに一番近づいたのが、実はこの男であったのだ。しかし、彼は肝心のコミュニケーションを職人たちとつていなかった。職人たちとコミュニケーションが取れない男が、妻とコミュニケーションが取れるだろうか。人間関係が築けるだろうか。『竹取物語』は貨幣経済が未だ成熟していない十世紀前半という成立期にあつて、既にそうした問題意識を持っているといつていい。

それをそのまま踏襲した『斑竹姑娘』も、商取引でのコミュニケーション不全が求婚の失敗とイコールであるという認識を引き継いでいる。人間関係の基本としての取引、モノとモノ（あ

るいは金品)との交換が正しく行われてさえいれば、商人の息子もまた天女を妻とすることが可能だったはずだ。人間関係が正しく結べない者は妻帯者(＝大人)の資格はないのであり、逆に言えば、正しく商取引の行える者は、ほかの人間関係においても適切な関係を結ぶことができる。こうした考え方を持っている点では、『斑竹姑娘』を生み出した現代中国も『竹取物語』の日本と共通するものがあると考えられる。

しかし、一方で興味深いのは『竹取物語』においては依頼主のくらもちの皇子が間の悪い時に未払分を請求してきた職人たちを「血の流るるまで打ぜさせたまふ」と打擲するのに対し、『斑竹姑娘』では依頼主の商人の息子が、自分たちの作品が無駄になったという事で逆に漢人の職人たちに拉致される(恐らく暴行されるのだろう)という、正反対の展開になっていることである。

この差異について西田禎元は「名譽を失っても皇子は依然として権力者であるが、金錢に關した信賴を失つたという商人の息子の權威は地に落ちたのである」と説明している。つまり商人の息子なのに商取引で失敗したのが大きい、というのである。しかし、それだけではあるまい。筆者はこの差異に、『斑竹姑娘』の『竹取物語』批評を見ることができるよう思う。

つまり『竹取物語』のくらもちの皇子の非道ぶりへの批評である。西田は『竹取物語』の職人はかぐや姫に報酬を受け取りに行った俗物であり、「物語作者から、その俗物性は指摘されなければなるまい」と述べるが、そもそも対価を支払わなかつ

たのは皇子であり、なぜ職人たちが打擲されねばならないのか、やはり疑問が残るところであろう。見方を変えれば職人たちは、かぐや姫が詐欺者の手に落ちるのを防いだ功労者なのである。その彼らがなぜ罰を受けねばならないのか。そうした批評意識が、『竹取物語』を逆転させ、逆に職人たちが求婚者を拉致する展開にさせたのではないかと思われる。

と考えると、職人が「漢人」であると記される点も意味深長であろう。これまで漢人は様々な優れた文化、文明を持つていながら、例えばこの商人のような金に物を言わせる連中に煮え湯を飲まされてきたのである。一部、既に西田も指摘しているところではあるが、そのような漢民族としてのプライド、あるいは被害者意識がこの商人の息子をただでは置かせなかつたのだろう。新中国における漢民族の被害者意識は、もちろん故なきことではない。自国の国土を踏みにじるような行為が、十九世紀から二十世紀前半にかけてのある場面で確かに(日本を始めとする)諸外国によってなされていたわけであり、それに一方ならず腹立ちを覚える中国国民がいても当然と言えよう。そうした人々の意識が『斑竹姑娘』をして、「漢人」の職人を突き動かすところとなつたのではないだろうか。商人の息子を拉致する「漢人」の職人とは、「強奪」「略取」に対して立ち上がった新中国の国民たちの陰面なのであつた。

5、求婚譚後の類似と差異

——帝と帰っていくかぐや姫の問題

求婚者たちの求婚が退けられた後、『竹取物語』ではついに帝が登場することになる。『斑竹姑娘』ではこうした箇所は全くない。実はこれこそが、『竹取物語』と『斑竹姑娘』の最大の違いと言えるかもしれない。

なぜ、『斑竹姑娘』には帝が登場しないのか。これは日本の帝が持つある種の特殊性が作用としていたのではなからうか。特殊性ということをとさら言い立てても無意味なことを承知で言えば、中国の皇帝ほどの権力を持つてはいないのに君臨している帝という特殊性がよく現れているのが、実は『竹取物語』の帝なのである。

帝が家を訪れ、かぐや姫を強引に連れ帰ろうとしたところ、彼女は「きと影になりぬ」と消え失せてしまう。帝はそんな彼女を「はかなく口惜し」と思いながら「なほ、めでたく思しめさるる」と、その長所を賞賛していくのである。もしこれが中国の皇帝ならどうであろうか。少なくとも「口惜し」と思いながらその素晴らしさに惹かれるというような、ある面では矛盾的とも言える人間臭い一面を覗かせるようなことは決してないのではあるまいか。

続けて帝は三年間、かぐや姫と文通を続けて、その間、一切他の女性を近づけなかったという。ある意味ではかぐや姫の美点への賞賛であらうが、そのように自分の立場を忘れて、相手

の美を賞賛するようなところが日本の帝にはある。『源氏物語』の桐壺帝がまさにそうであったし、『狭衣物語』の狭衣帝にしても、『夜の寝覚』の朱雀帝にしても、自分の帝という立場以上に、好む女性への熱情を燃やした帝たちであった。

そのような「恋する帝」の存在が新中国では理解され得ないものとして捨象されざるを得なかったのは、文化の違いとして肯けるところではなからうか。仮にも皇帝の命であれば、世にある女性は「きと影になりぬ」など許されることではない。しかしそれが許されてしまうだけでなく、帝は自分に反抗した女性を「めでたく」さえ思ったというのである。さすがと手ぶらで帰る帝の姿は、その後の平安文学を知っている者ならともかく、外国人（特に強権を振るった皇帝が歴史上枚挙にいとまがない中国の国民）にはなかなか理解されにくいものではなからうか。そのような今につながる日本の天皇制の特殊性、異様さを、はしなくも『斑竹姑娘』の無言が如実に語っているように思われる。

帝の登場はないまま、『斑竹姑娘』ではランバと天女はめでたく結ばれることとなる。この結末からは、親孝行でよく働く息子が最終的に幸せになれるという教訓性が含まれているのはもちろんのことだが、同時に「労働者の勝利」というテーマがかなり見やすい形で描かれている。子ども向けの物語であってみればその「改変」も理解されるところではあるが、一方で、新中国に流れる「労働者賛美」の雰囲気がこの「改変」には大きく影響しているように思われる。

また、一部日本でも見られることだが、特に中国では原作をハッピーエンドの結末に翻案することがまま見られる。例えば有名などころでは元の時代の戯曲『西廂記』は、唐の時代の伝奇小説『鶯鶯伝』が原作だが、原作が悲恋で終わったものが『西廂記』では主人公とヒロインが結ばれるという幸福な結末に作り変えられている。また、民間説話として広く人口に膾炙していた蛇と人との異類婚姻譚『白蛇伝』も、古い形のものには悲劇に終わるのだが、翻案され京劇として演じられる時点では二人が結ばれて末永く暮らすという幸福な結末へと「改変」されている（更にそれを翻案した日本のアニメ映画『白蛇伝』（一九五八年）もその幸福な結末を踏襲している）。

これには、物語に幸福な結末を望む中国人の気質が関係しているのではないか。優れた中国文学研究者でもあった作家魯迅は、中国人はその本性として和やかな時間を過ごすことを好むと指摘し、小説の中で「欠陥」が描かれれば読者は不快になると述べている^{注10}。人を不快にさせる「欠陥」があれば補われなければならぬ。事実、長い時間の中で、多くの物語の「欠陥」が補われてきた。それと同様に『竹取物語』の「欠陥」も補われたのである。つまり、この改変には原作『竹取物語』を中国人の好む結末に変えながら、さらに「労働者賛美」の（意地の悪い見方をすれば共産主義のプロバガンダとも言える）意味合いを持たせるといふ二つの意図が含まれている。絶対に天女はランパと結ばれねばならないのだ。労働者ランパと結ばれ、幸せになることで彼女の美は輝きを増すのである。

一方の『竹取物語』では、かぐや姫はどの男のものにもなることなく月に帰っていく。『源氏物語』「幻」巻で紫上を失った光源氏の姿を見るにつけ、また『狭衣物語』の末尾で、女二の宮に拒絶されて呆然とする狭衣帝の姿を見るにつけ、こうした手に入らない「永遠の女性」思慕の物語が、日本では好まれてきたことに思い至る（その後、中世の王朝物語で「忍び音」型として定着する物語群もこのパターンの変奏である）。根底にあるのは失われるからこそ、美しいという発想だろう。いつか失われるからこそ、輝きを放つ。いつまでもそこにいれば、どんな美しいものでも色褪せてしまおうし、飽きてしまおうだろう。

一つの仮定として、たとえばかぐや姫が『斑竹姑娘』の天女のように帝と結ばれてしまったらどうなるだろう。帝はいつか彼女に飽きるだろうし、帝はまた「王権者の務め」として他の女性のところに行かなくてはならない。そこにあるのは色褪せた日常であり、美しい物語ではない。失われるからこそ、あるいは有限だからこそ美しい。その美の権化として、彼女は絶対に月へ帰らなければならないのだ。月に帰ることで彼女の美は永遠に保存されるということなのだろう。

つまり、「労働者賛美」の物語『斑竹姑娘』と、「永遠の女性」思慕の物語『竹取物語』は、その性格こそ大きく異なれ、どちらも最後、ヒロインが最も美しい形で描かれているという共通点があるといえよう。それぞれの物語で、それぞれのヒロインの美しさが物語の中で保存される。両物語の結末の違いからは日中両国の美意識の違いを見ることができ、かつ新中国の置か

れた立ち位置も浮き彫りになっていると言えるのであった。

まとめ

以上、本論では『斑竹姑娘』を現代中国における『竹取物語』享受の一形態と見て、論を進めてきたわけであるが、様々なことが指摘できたように思われる。

まず、ヒロインを見つけるまでの経緯からは、搾取に対して対策を練る農民たちの様子、そしてそのたくましさを見て取ることができた。こと『斑竹姑娘』成立当時の中国に顕著であったが、為政者の横暴、あるいは無策による苦難は大なり小なり、どの時代も農民を襲ったものと思われる。その権力者の圧力に対して対策を練ることで初めて、天からの贈り物を受け取れるのだという『斑竹姑娘』のメッセージは日本の物語ではなかなか見られないものであり、そこに中国らしい改変の跡を見ることができよう。

また、難題求婚の意味を「求婚者との結婚拒否」に見出し、その点に『竹取物語』と『斑竹姑娘』との共通性を見た。しかし、『斑竹姑娘』の難題求婚は主人公ランパと結ばれるための「求婚拒否」であって、『竹取物語』のように求婚そのものを拒否しているわけではないという違いがあった。その違いには『竹取物語』の男性観があり、それは『源氏物語』など後の王朝文学に受け継がれていく考え方もあったことを指摘し、「夫」ではなく「父」にすぎるといった物語のヒロインの草分け的存在として、かぐや姫を見ることもできることを述べた。

『斑竹姑娘』との差異を明確にすることで『竹取物語』の独自性、そして後世へ与えた影響も浮き彫りになったといえよう。

難題求婚譚の類似と差異からは、『竹取物語』が風刺の方法を『斑竹姑娘』に示唆した可能性を指摘した。また難題の内容もだいたい似通っていると言えるものの、その中に見られる違いを通して、日中両国の憧憬の対象の違いについても考察した。さらに、くらしの皇子と商人の息子があがる面では対応関係にありながら、結末は全く逆になっている点から、『斑竹姑娘』の批評意識、そして漢人（漢民族）のブライドを見ることができると指摘した。後世の作品には、先行する類似作品への批評、異議申立てが必ずあるはずであり、それは時に時間や国境を越える。その一例を今回は指摘できたかと思う。

さらに、結末の差異から日本の天皇という存在のある種の独自性、そして日中の物語観の違い、さらには美意識の違いを考察した。改作という営みの中には、先に指摘した「批評」の他にも、想定される読者にとつての「欠陥」を補い、望ましい結末に書き換えるという作業も含まれているはずである。月に帰っていくかぐや姫の物語は、平安時代の日本人には理想的な結末でも、中国人にとつては望ましくなかった可能性が高い。そのことを他の改作本の例、あるいは魯迅の発言を援用して述べてみたわけである。

話型は時間を越え、国境を越えて享受される。今回はその一例を挙げただけにすぎないが、それでも日中間の興味深い類似と差異が様々見えてきたように思われる。今後はまた別の文学

作品を比較、考察することで、さらなる日中の相互理解の助けとしていけたらと考えている。

多岐にわたる考察であったため、色々と不備も少なくないと思う。大方の御批正をお願いしたい。

注

- 1 宋成徳『竹取物語』、「竹公主」から「斑竹姑娘」へ（『京大文学部国文学論叢』第一二号 二〇〇四年九月）などに指摘がある。
- 2 君島久子「チベットの「竹娘説話」と「竹取物語」」（『説話文学研究』第六号 一九七二年二月）
- 3 百田弥栄子「竹取物語の成立に関する一考察」（『アジア・アフリカ語学院紀要』第三号 一九七二年一月）
- 4 片桐洋一訳注『新編日本古典文学全集 竹取物語』（小学館、一九九四年）の「解説」に指摘がある。
- 5 注（1）論文と同じ
- 6 鄭が「日本の神仙故事、鄭振鐸訳述」と記しており、『竹取物語』からは明示されていないものの、作者自身、日本の物語からの訳本であることを打ち出している。
- 7 逆に考えれば、たとえ五つの宝物のうちの一つに過ぎなくとも、それを国外に求めようとする発想は、『竹取物語』が『斑竹姑娘』に与えた影響といえよう。中国の自国中心主義は中華思想としてつとに有名であるが、『竹

取物語』は国外にも宝物があることを『斑竹姑娘』に、そして新中国に示唆したのである。

- 8 西田禎元『「竹取物語」と「斑竹姑娘」』（『創大アジア研究』第一六号 一九九五年三月）

9 筆者はこの「改作」に、平安後期物語『夜の寝覚』にも施された改作と同種のものを感じずにはいられない。室町期の改作本『夜寝覚物語』は、原作『夜の寝覚』を改作し、男主人公とヒロインが結ばれるハッピーエンドに作り変えた。原作本では満足できなかった読者による「理想的」な結末の希求としいが、とするならば『斑竹姑娘』も、『竹取物語』の結末に満足できなかったことによる「改作」とは考えられないか。

- 10 魯迅著・今村与志雄訳『中国小説史略 上』（ちくま学芸文庫、一九九七年）

（いせ・ひかる 二〇一二年度博士後期課程単位修得退学
二〇一四年度博士後期課程修了）